

旧閑谷学校のシンボル、楷の木が紅葉の最盛期を迎えた。葉が対生に整ってつくことから、皆同じく調子が合う意の「楷」と名付けられた。模範や手本の意として書体の名にも用いられる。中国で科挙の合格者に楷で作った笏が授けられたことにちなんで、「学問の木」と呼ばれるようになった。道義を重んじる公正な人たれ、という期待も込められている。

孔子が没した際に弟子たちが持ち寄った木のうち、子貢が植えたのが楷だそうだが、旧閑谷学校の一对は、孔子を祭る聖廟に向かって左が紅葉し、右が黄葉する。白澤保美・林学博士が1915年、中国・山東省の孔子の墓所から実を持ち帰って育苗したうちの2本であるが、それを旧閑谷学校に届けてくれたのは、備前市出身の明石照男という銀行家だ。

明石は、閑谷学校の教授として

岡山県青少年教育センター 香山 真一
閑谷学校所長

一日一題

楷の木に思う

全盛期を築いた武元君立の直系の子孫である。岡山の俊英として東京帝大を出て第一銀行に入り、創業者渋沢栄一の娘と結婚した。明治の大実業家である渋沢は講演録『論語と算盤』の中で、道義にのっとった公正な商売をし、もうけた利益は世の中の幸せのために使うことを勧めている。明石が多額の寄付金を贈って閑谷学校の蔵書を増やしたのも、愛郷心に加えて渋沢の志に共鳴したところが大きいだろう。

旧閑谷学校的一对は、垂直に伸びる一般の楷と違って、横に枝を伸ばす。地中に岩盤があって根を深く張れないからだ。数年前には土壌改良を余儀なくされるほどに窮したが、甲斐あって葉を茂らせるようになった。孔子が苦勞を続けた末、崇敬されるまでになったことが思い合わせられる。